

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

東京大学

前期日程

科目

英語

総括

試験時間	120分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	120点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

「読解力」「作文力」「リスニング力」をオールラウンドに測ろうとする問題構成であり、求められている学力は例年と変わらない。形式面では、1(A)と2(B)に変化があった。読解問題の語数は昨年よりも約400語増加(約2,850語→約3,250語)しており、制限時間を考えると全体の分量は非常に多い。例年同様、すばやく問題の狙いをつかみ、設問を的確に処理する力が必要である。

〈特記事項・トピックス〉

- 1(A) 2019年度から引き続き、設問文は「要旨をまとめよ」ではなく「要約せよ」であり、制限字数も2017年度から変わらず70～80字であったが、解答の書き出しが指定されていた点が、例年と大きく異なっていた。
- 1(B) 昨年同様、文補充と整序英作文が出題された。昨年は1つだった不要選択肢が2つになった。
- 2 例年通り2題出題された。(A)の自由英作文は、与えられた英語の問いについて述べるという形式で、語数は例年同様60～80語だった。(B)は、和文英訳と単語補充が融合した新傾向の問題となり、和文英訳の設問文も「文脈を考慮しながら、本文中の括弧内の内容を英語で表現せよ」となった。
- 3 例年通り(A)(B)(C)の3セクションに分かれていた。昨年同様各セクションの内容は独立しており、(B)はポッドキャストの一部という設定の出題であった。
- 4(A) 例年通り英文中の誤りを含む箇所を指摘するものであった。
- 4(B) 例年通り下線部訳が3題出題されたが、例年よりも下線部の総語数が増加した。また、指示語ではなく、下線部中の英単語の内容を補って訳すことが求められた点が新傾向であった。
- 5 2020年度以来6年ぶりに、エッセイではなく小説からの出題となった。昨年同様、整序英作文は出題されず、記述問題は説明問題が2題と和訳問題が1題となった。客観式選択問題も、昨年に似た形式となった。

〈合格への学習対策〉

東大は入試問題を通じて「基礎を重視し、英語のすべての分野を満遍なく学習せよ」というメッセージを発信している。このメッセージを真摯に受け止め、バランスの良い学習を心掛けることが大切である。分量が多いことも特徴の1つであるので、過去問を使い問題演習を十分にこなすことが合格には欠かせない。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
1(A)	記述	大意要約 「人を惹きつけるフロイトの著作」(約360語)	昨年までと異なり、要約の解答の書き出しが指定されていた。英文自体が語彙、内容ともに理解しづらく、特に第2段落が言わんとすることを捉えるのが非常に難しかった。結果として答案をまとめるのも例年と比べてかなり難しく、多くの受験生が苦労したであろう。	難
1(B)	客観・記述	文補充 「『もの』と『関係性』を生み出すところ」(本文:約760語/選択肢:約110語)	〈文補充5カ所+整序英作文〉という例年通りの構成。文章はやや抽象的であるが、文補充は紛らわしい選択肢が少なく、解き易い問題であった。整序英作文は例年通り難度が高いものの、文脈が大きなヒントになることに加え、三単現の-sなどの文法的ヒントに着目すれば正解に辿り着けるだろう。	標準

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

問題番号	出題形式	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
2(A)	記述	自由英作文	形式は基本的に従来と同じだが、書くべき内容が英語のみで指示されていた点と、問題指示文に「理由を添えて」という条件がなかった点が、例年と異なっていた。	やや難
2(B)	記述・客観	和文英訳＋空所補充	18 世紀に書かれたエッセイの抜粋を読み、本文中のカッコ内の日本語を英訳する設問と、本文中の2つの空所に入れるべき単語の組み合わせとして適切なものを選ぶ設問で構成されている新傾向の問題。和文英訳は素直に直訳すればよい箇所がほとんどであり、さほど苦労しないだろう。空所補充も標準的な難易度であった。	標準
3	客観	リスニング		
		(A)「ドイツ教育制度の“平等”の裏側」 (約 530 語)	(A) 講義の論理展開を踏まえ、原因や比較の観点を意識しながら、制度の建前と実態の違いを聞き分けることが求められた。また、該当箇所が分散しているため解きづらい設問があった。	標準
		(B)「刑務所建築の専門家へのインタビュー」 (約 510 語)	(B) インタビュアーの質問を通して話題の転換を把握し、歴史的説明と現状批判を区別しながら聞き取る必要があった。該当箇所と設問の対応関係が見抜きづらいので、やや解きづらい設問があった。	標準
		(C)「地衣類の二重仮説をめぐる講義」 (約 540 語)	(C) 専門用語に関する記述や比喻表現に注意しながら、講義の論理展開を追う力が求められた。設問そのものは素直なものが多いが、放送内容が非常に難解だったので、苦労した受験生が多かっただろう。	やや難
4(A)	客観	正誤判定 「イギリス人から見た日本の能」 (約 660 語)	昨年度の「文法上または内容上の誤り」から「文法上または文脈上の誤り」へと設問文が変化したものの、内容を理解しつつ誤りを指摘することが求められている点に変わりはない。文全体の構造や細部の語法に関わるものから、純粋に文意に関わるものまで、誤りは多岐に渡り、苦戦した受験生も多かったかもしれない。	やや難
4(B)	記述	英文和訳 「抵抗としての休息」 (約 340 語)	(ア) corner, from a disconnected place など訳出に迷う表現が含まれていた。 (イ) “unweaving”の内容を補うよう求められていたが、前後の文脈を踏まえてどの程度説明すべきか悩ましく感じられたかもしれない。述語動詞を持たない後半の名詞句をどう処理するかもポイントであった。 (ウ) as powerful evidence の文中での役割を読み取るのは、かなり難しかったであろう。	やや難

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

問題番号	出題形式	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
5	記述・客観	読解(小説) 「それが犬ではなく人間 のとき」(約1,000語)	6年ぶりの「小説」からの出題。昨年に比べ語数が約110語増加しており、エッセイに比べ状況が把握しにくく、難度の高い表現も含まれているため、非常に読みづらく感じた受験生がほとんどであったと思われる。(A)は冒頭のItが何を指しているかを説明する問題。この解答を考えながら英文を読み進めることが、全体の内容理解につながるようになったはずである。(B)は「ドアが開いている経緯」を説明する問題。元の状況がどうであり、それがなぜ変わったのかを解答に含める必要があった。(C)は英文和訳問題。no以降の文中での働きが見抜けたかどうかのポイントであった。(27)～(34)は客観式の問題。(31)の解答に迷った受験生が多かったと思われる。	難

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。

出典・資料

1(A)

Adam Phillips: "Introduction," *The Penguin Freud Reader*

1(B)

Keith J. Holyoak: *The Human Edge: Analogy and the Roots of Creative Intelligence*

2(B)

Joseph Addison: *The Spectator*

3(A)

Karen Lillie, *Egalitarian or elite? The case of the German education system*

3(C)

Merlin Sheldrake, *Entangled Life: How Fungi Make Our Worlds, Change Our Minds & Shape Our Futures*

4(A)

Marie C. Stopes, *Plays of Old Japan, the Nō*

4(B)

Tricia Hersey, *Rest Is Resistance*

5

Amy Hempel, *When It's Human Instead of When It's Dog.*